

小學初等讀本

大窪實閣
三吉文編

卷二

特 34

976

大日本教育會書籍館

一	二
四册	五號
一	六函
架	

大陸實閱
三吉艾編

卷二

水
學
心
算
讀
本

書林
福井瀧久藏藏版

明治二十一年三月三十一日 內務省文部省

學
初等讀本卷之二

第一章

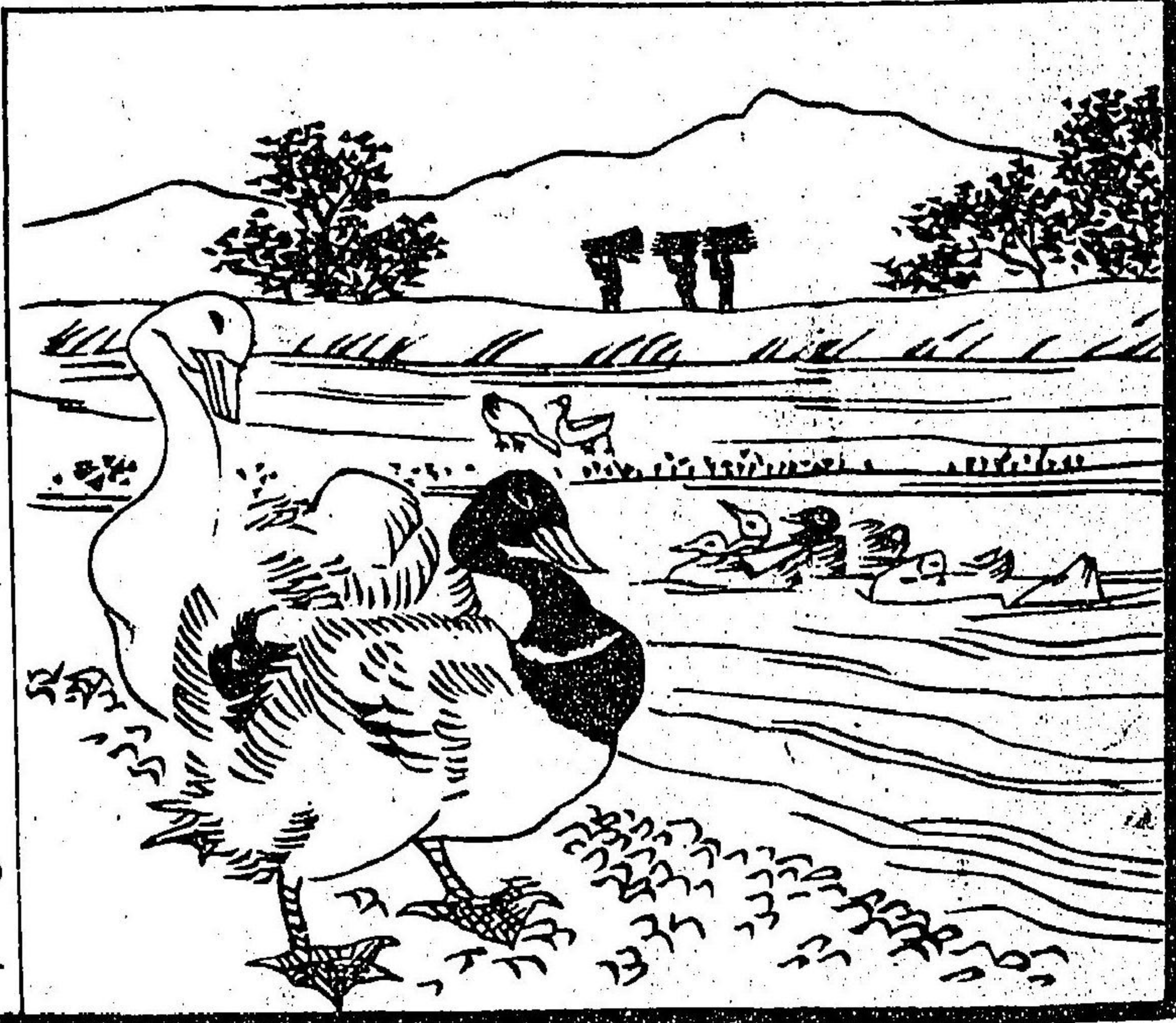
大陸 實閱
三吉 艾編

田島よ出で、働くものを農といひ諸物を製造するものを工といひ諸品を賣買するものを商といふ。農をくんとを。何を以てゐる。食物を得ん。工をくんとを。

家も衣服も得る能くば商なくんを何物よても容易よ求むるらば。故よ。此の三の者も人間よ一日も欠くべらざる者にしてもとより貴賤の別なきなり。

鶩ハ家よ飼ふ鳥にして水上を自由に游泳也。其頸も長くして其尾も短く。嘴も平くして其端まるく足も短く

して指の間に膜あり。之を蹼といふ水上を游泳するときは之を以て水をかき進む。蹼のあるも鶩のこにあらば水鳥の類に才皆未きあり。故よ諸鳥の中にて水鳥も其足を見て容易に區別をること



を得べし。

第二章

汝も河に行きて遊ぶことを好むり。○
深き河にハ行くことあられも一階る
ときも再歸り來ることや能わざるべ
し。○又淺き河といつども岸の傍を遠
くはふるゝこと勿き。○河の中央又至
れを深き處あるものをなればなり。

犬ハ能く人に馴き。又能く人の恩を知
る。○良き犬も終夜家の傍を去らばも
し。あやしきものゝ來るときも忽吠へ
て之を報む。○又獸獵に用ふる犬あり。
之を獵犬といふ。○獵師山に入りて獸
類を獵らんとする時先獵犬をた
なち獸類を探して之を追ひ出さしむ。
○犬も嗅ぐこと極てく鋭きもの故獸

類の過ぎし跡を嗅ぎ能く其潜伏する
ところに探し至るなり。犬の毛色は
種々ありて。一樣ならざり。又其形も種類
によりて。各異きり。

第三章

數多の樵夫あり。皆力を盡して働けり。
○鋸にて木をきるものあり。斧にて之
を割るものあり。繩にて之を束ぬるも

のあり。○彼等も斯の
如く働けるに因り。我
等の家に於てハ。日々
不自由なく薪柴を用
ふることを得るあり。
○薪柴を姑おきを積



置き。日を経て其枯る。後にあらざ
れむ。之を用ひば。未枯きざる木を。

水氣多くして燃えざるものゆゑなり。凡て生物の力を計るにても其体の重さを本となし以て其強弱を定む。蟻ハ。小き蟲なきども其力も甚強し。その体より大にして且重きも乃ち我ひま行くを見て知るなり。木の蟲は夏の間ハ終日息ふことなく互に力を合せて食物を求免持ち歸りて之を貯ふ。故

に。冬日に至り土中に伏して出ることなき時といへども更よ食料も乏きことなり。人にして貧困も陥り食物もなく衣服もなく。餓凍ゆるも至るも皆怠惰にして職業を勉めざるに因るものあり。きれバ此等の人ハ彼の小き蟻も劣るといふべし。耻づべきことならんや。

第四章

此處ハ。繁華なる市街にして。數多の家
 屋。軒を並べ。買客常に
 群を為し。其の市街
 の商人も皆正直に
 て。人を欺らば。古き物
 ハ。古しといひ。やまき
 品をたらく賣らば。総



て。誠の言と。正き價を以て常少くをば。
 故に。人々。大に之を信ず。來り買ふも
 の。日に加さり。遂に。斯も繁華よおも
 むきなり。

鳥ハ。鳩より大にして。鳶より小なり。
 其の鳥にも。二三の種類あきども。羽毛
 皆黒く。体の大きも。大抵。同トきを以て。
 其區別を甚知り難し。されども。他の

諸鳥とて。一目して。區別あることを得るなり。○其棲む處も定なり。○雖殊に人家の多き處に多し。○此鳥は。田畠の植物被害し。庭園乃果物或傷ひ。又人の乾置ける食物或奪去るなど。人の害を為さず。甚多し。故に世人之を厭むざるものなり。

第五章

汝等。柿の實を食せしことあらん。○其色の赤きハ既に熟したるものにして。青き未熟せざるものなり。○能く熟したるものも。柔し。味甘く。未熟せざるものも。乃ちたたく。味澁し。○通常人乃好みて。食するものも。殆ど熟して。いまだ柔なるに至らざるものなり。○柿或食むるときは。必其皮

を去りて食まべし。○まづて。果物の皮ハ。甚消化し難きものなり。

二人の小兒の並ひ走るを見よ。○此ハ走ることの。遅速を競ふにあらば能く久きに耐ふるや否やを比ぶる為なり。○彼等も兩手



の拳を胸よあて。口を閉ぢ。膝を多く屈めびして走れり。○斯の如く走る時も。疲るくこぢ少くして。久きに耐ふることを得るものなり。○凡て事も。久きに耐ふるを貴ぶ。○彼等今ハ。同一速さよ走せやも。其久きよ耐ふる者。必勝を得るなり。

第六章

野菜の類也。大抵畠に植作るものな
きども。蕨。款冬の如き也。山野に自生す
るものなり。○野菜よて根を食するも
のと。葉を食するものと。實を食するも
のとあり。○根を食するものと。薑。芋
の類なり。葉を食するものと。苣蒿。水
菜の類なり。實を食するものと。茄子。
胡瓜の類あり。○又。蘿蔔。蕪菁の如き。根

葉とみに食すべきものあるなり。
果物を。其味。或ハ甘く。或ハ酸くして。各
同トあるべし。○此等も多く生よて。食す
れども。梅の如く。塩漬となして。食する
ものあり。栗の如く。焼き。或ハ煮て。食す
るものもあり。○又。葡萄酒。蜜柑等より。一
種の酒を製以べし。市中に賣る所の
葡萄酒。蜜柑酒。即こきなり。

第七章

數多の小兒相集り。犬を闘せしめて遊べり。杖を振るものあり。石を投ぐるものありて。皆大なる聲を出し。前後をも覺えび。驅廻れり。土乃地を過ぐる人々も。為し



往來を妨げらきて。進むことを得び。此小兒等も。學校より出るも乃なるや。否。學校の生徒も。あらざるべし。學校の生徒も。常より良き教を聞き。固く之を守る故也。たとひ。學校の外に在るとも。斯る惡き遊をむ。為さざるなり。牽牛花ハ。其形。漏斗の如く。一枚の瓣より成れり。菊の花も。多くの瓣あるが

ごとしと雖實を一枚の長き瓣より成れる花のあまよ集りたるものなり。此等の花ハ其色種々ありて定れる色なきが如し。然牽牛花にも決して黄色なるものなく菊花にも青色なるものなり。汝等草木の花を見るごとし心を留めて之を檢せよ種々の珍しきことを發見するごとしあるべし。

第八章

鐵瓶を鐵にて造り其蓋は大抵銅にて造れり。鐵も銅も甚堅きもろなきども強き熱を與ふきを漸々溶けて火の如き湯となるあり其湯を型に流し入き以て種々の器を製す之を鑄物といふ。鍋釜の類も皆斯の如くして造りたるものなり。金屬の中に於て其

功用の廣きと鐵を以て第一とし之に次ぐものを銅なり。○金銀の如きは其價貴けきども効用に至りて甚狭きものと云ふ。

夜將に明けんとし雞ハねぐらの中又鳴き鳥ハ林を出て飛ぶ。○鋤を擔ふて野に出る農夫あり。鎌拔提げて山に入る樵夫あり。○今も夏日なきば日

中に働くことを得べ。故に朝殊に早く起きて各其業に就くなり。

第九章



牛ハ獸類の大なるものにして頭に尖りたる二本の角あり。○牛ハ馬の如く走らば其歩むこと遅

一と雖馬より比すれを筋力強くして
 疲るゝとゆく少し。故に能く大なる
 車を牽き或も重き荷を負ひ或ハ鋤を
 ひきて田を耕むなど人の力を助くる
 ことと甚多し。牛の肉及乳汁ハ無比
 の滋養物なり又其皮ハ質強くして種
 々の皮細工に用ひ其骨ハ上等の肥料
 となればし。日本の牛を背上少しく

高くして西洋の牛を殆平カなり。ゆゑ
 に背上を見て其産地を知ることを得
 べし。
 鹽も一の礦物よりして食物の調理に欠
 くべからざるものと比。鹽をまきとき
 を食物に味を附けること能てざるの
 こならび人の健康を保つこと能てざ
 るべし。又鹽を物の腐敗を防ぐの功

あり。塩魚の類。即是なり。○塩を海水を煮つめて。之を製は。海水を塩を含まるを以て。久く之を煮ると。きを水も。皆蒸發し。塩のみ釜に残るなり。○又。山より掘り出たものあり。おれも人の製したるものより。あらば。天然。一塊とありて。在るものなり。

第十章

日將に暮んとす。旅人ありて。道に迷ひ。大に困めり。○たぬく一人の男兒に遇ひ。道を問ひけるに。男兒も亦之を知らば。○ききども。



旅人の困を想ひ。直よ走りて。家よ歸り。之を問ひ来りて。懇に教へ示したり。

○旅人の喜む。いとんろたなく。渡場に。舟を得し思を爲し。此恩を死せしむも忘れどとて。再三禮を爲して。辭し去れり。○今此男兒の。まごの身の勞を厭むべし。て人の困を救ひしを。誠と感むべきの行なり。

汝ハ藤の花を見しことあらん。其花の形を話し得るや。○其形ハ荳花の如く。

蛾形を爲して。一莖に列び着けり。故に之を一見むれむ。恰長き総乃如し。○其色を如何なる色なりしや。○我の見し花ハ紫色なりし。白色なるものも有りしと聞けり。○汝を紫色を製することを得るや。○紫色を赤色と青色とを合せたる色なれむ。之を製すること難きにあらざるべし。

第十一章

今の世に生きて。古の事を知り。足を勞
せ。び。し。て。賢哲の話を聞くことを得る
を。是。實。に。書。籍。の。賜。な。り。を。れ。を。書。籍
の。貴。き。こ。と。教。師。と。均。し。き。も。の。な。れ。を。
慎。こ。て。使。用。せ。ざ。る。べ。う。ら。ば。故。と。之
を。裂。き。之。を。汚。す。等。の。こ。と。を。勿。論。或。ハ
不。潔。の。處。に。置。き。又。ハ。汚。れ。し。も。の。と。一

同に包む等の不注意あるべうらば。
日暖にして。風清く。樹を。皆。美しき花を
開き。草を。総て。青き芽
を生じ。林に。囀る鳥あ
り。野に。戯る蝶あり。
春日の景色。一として。
目を慰め。心を樂まし
めざるものなし。



第十二章

総て事の正あらざるを知るるときハ。目
 前に利益あることと思ふとも。決して
 之を行ふべからば。仮令一時ハ。利益
 を得るも。不正乃利益を。必不幸乃種
 となるべし。又善き行を。一時ハ。身
 に損あるとも。心を決して之を為さべ
 し。後に必大利あるものなり。事

の善惡を撰むば。唯利益の有無のこを
 計るを。獸心と名づけ。仮令自ら人なる
 も。人にあらばと思ふ
 べし。空氣も。目に見ること
 能わざきとも。地上に
 充ちざる處なし。扇を
 動あせむ。風を生



ト疾く走れを顔にふるものあるハ。こき空氣の充つる証なり。○風を即。空氣の流動にして其通ふこと早きときハ。強き風となる。○又風なきハ。空氣の流動なきゆゑと知るべし。○人の空氣中に住むハ。魚の水中に住むが如し。魚ハ水をけきバ死し。人ハ空氣をけきバ生を保つこと能わざるなり。

第十三章

凡て汚穢を疾病の原因となり。疾病も。死亡の原因となるものあれを。洒掃と沐浴も。實に生命を保つに欠くべからざるものなり。○若。洒掃を惰れを。汚物漸積りて。臭氣を發せらるに至る。其臭氣も。即。毒氣として。之を吸ふも。恰。毒物を飲むと同ト病を生ぜざるこ

となり。又人の皮膚にも無数の小孔ありて体内の汚水絶へば蒸發するものなり。もし沐浴を忽に止る時其小孔ハ垢の爲まうづまりて汚水ハ蒸發するを得ず。然時其垢より種々の病を生ず。治むべからざるに至ることあり。其の故に家の内外其間を洒掃を惰るべからば時の寒暑に拘

らば沐浴を忽に止ることあはれ。

學小初等讀本卷之二終



明治十七年三月廿六日板權免許

明治二十年一月廿七日三版御届

第二卷

定價五錢五厘

閱者

石川縣士族

大窪

實

編者

山縣士族

三吉

艾

出版人

上京區第廿二組錦砂町十五番五寄由

福井

源次郎

賣弘

下京區第一組三條通寺町東之石橋町三番

福井

孝太郎

上京區第廿二組寺町茶屋七番寺前町三番

印

